

第49回 中高校生の吃音のつどい(Summer Camp!)

8月7日(土)、8日(日)、小学生6人、中学生4人、高校生9人、ご両親8人、スタッフ25人の計52名が参加。捜真学院(スタッフ富田佐綾の母校)の御殿場自然学校にて開催。今回久しぶりにリーダーをやり、無事終わった安堵感を感じている。サマーキャンプは自分にとって、一年のつどいの中で最も楽しみなつどいである。特にリーダーを担った際は、当日が待ち切れないくらいだ。今回も初めての場所でキャンプファイアまで企画して、皆さんがどんな反応をされるのかドキドキだった。新しい試みを皆さんに楽しんでもらい、吃音についても新たな発見、考えが生まれたらそれで良いと思う。つどいで出会える仲間は素晴らしいものだと思う。我々スタッフは参加者のため、少しでも良いつどいにしたい。参加者の方々は他の人の話に真剣に耳を傾け、同じ思いや時間を共有していただく。自分の時間を自身に投資する人達が増える中、つどいで経験した他人に寄り添う姿勢は人間性を養う上で大いに助けとなると思う。必ず社会人になっても生きてくるだろう。(リーダー:江原智弥、山田俊介、福田洋佑)

T. N君(小3 岐阜県大垣市在住)

ぼくは、しず岡けんと言うけんにあるところにサマーキャンプを、八月七、八日と一ぱく二日をしました。そのサマーキャンプには、吃音(きつおん)と言う人があつまって、あそんだり話し合ったりしてとまる所です。

八月七日の夜は、キャンプファイアーと花火をやりました。七日の夜のねる時は、いっぱいおもしろい話をしていたらいつのまにか、夜の一時すぎになっていました。

おきたら、もう七時十五分ぐらいになっていました。そして、八日の朝ごはんは、とてもおいしそうだったので、全部食べました。ごはんをたべたらすぐあそんでいました。はしりまわったり、ベッドでねころんだりたんけんをしてあそんでいました。(おわり)

——『吃音(きつおん)』のところは、作文用紙では、漢字で『吃音』と書いてあり、そこにルビがふってあります。私は『吃音(きつおん)』の部分だけで感動していました。(母)

R. Nさん(小3 Nくんのお母さん)

「母さん、吃音(の人)ってたくさんいるね」

これは、次男が帰り道でつぶやいた言葉です。

今回のサマーキャンプに参加するにあたって、私には目的がありました。それは次男に、吃音のある中学・高校・大学生・社会人という小学生以外

の人たちに会わせるという目的です。次男は、吃音のある小学生には何人かと会っています。でも、大きいお兄さん・お姉さんには会ったことが無いに等しいのです。そして、願わくば、大きいお兄さん・お姉さんに思いっきり吃っていてもらいたかったのです。初めて参加した今回のサマーキャンプ。スタッフの方々は司会・進行をする訳ですから、見事に吃っていてくださいました。私の目的は見事に達成されました。

「母さん、吃音ってね、固まるタイプと、あ・あ・あ・あ・あって何回も言うタイプと、あーって伸ばすタイプがあるんやと」

「僕は、固まるタイプと何回も言うタイプやよ」

「それからね、僕は『あ行』で吃る」

これも、息子が帰り道につぶやいた言葉です。

うちでは吃音という話題を隠してはいませんが、敢えて突っ込んで話し合うこともありませんでした。せいぜい、学年が変わる時に担任に吃音のことを自分で言うか私が説明するかとか、吃音は息子のしゃべり方のくせの一つだよとか、そんな程度でした。先の息子のつぶやきを聞いた時、私は、自分は吃音の情報を本で読んだり聞いたりして色々を知っていましたが、息子には説明してなかったなと反省していました。もしかしたら息子は、毎月参加している吃音教室では同じような話を聞いていたかもしれませんが、このような事を私に話してくれたのは初めてでした。

実は、息子がこのような事を話してくれるとは、と

いうより、小学生の話し合いの時にきちんとスタッフの方々の話を聞いているとは思っていませんでした。息子は、今回のサマーキャンプは初参加です。『つどい』自体初参加でした。会場に着くまで緊張していました。ずーっと私の手を握っていました。無口でした。ところが、開会式が始まる頃から、同じ小3の男の子と仲良くなり、羽目をはずし過ぎなくらいはずしてしまっていたので、スタッフの方々の手を焼かせてしまったと思います。じっと座ってスタッフの話聞く訳ではなかったでしょう。スタッフの方々も手ごたえを感じられなかったのではないかと考えています。だから、息子のこのつぶやきは、小学生担当だったスタッフの方々にはぜひ、聞いてもらいたいです。そして、息子がここまで吃音の事をつっ込んで話す気持ちにさせてくださったことに感謝しています。

そして、サマーキャンプで出会ったお母さん方が素晴らしく良い方々でした。初参加の私を気遣ってくださり、何かと話の輪の中に入れていただきました。そして皆さん、パワフルでした。泊まりということもあって、時間は気にせずに話せるのは良かったです。子供のことで振り回されることも無く話せたのは有意義でした(その分スタッフさんにはご迷惑をおかけしましたが)。保護者だけの話し合いでは、地域によってまた年代によって、「ことばの教室」という言葉は同じだけれど、中身が違うことも分かりました。息子は去年の今頃は、吃音が原因ではないけれどいろいろあり、自己否定感にどっぷり漬かっていました。「僕に将来は無い」と言うまで自己否定をしていました。今回のサマーキャンプで、「吃音」という部分では自己否定にならない手助けをしていただけたのではないかなと思っています。なぜなら、「来年もサマーキャンプに行く！」と宣言をしていましたから。「遠くて無理なら諦めるけど」なんて私を気遣ってくれましたが、行く気は満々と見えました。

帰宅してから、「これから先いろいろな事がありますが、そんな時はサマーキャンプの事を思い出せばきっと乗り越えられますよ」なんていうメールをいただきました。本当に素敵な出会いがたくさんありました。思い切って出かけてみて良かったです。

最後になりましたが、サマーキャンプを企画・運

営してくださったスタッフの皆様、本当にありがとうございました。あれだけの大所帯を動かすのは大変だっただろうと思います。思い返せば、参加のしおりをいただいた時点で・・・いや、参加をしたいのですがと、お伺いのメールをした時点で私はスタッフの方々の丁寧な対応に感心をしていました。実際参加してからも、分からないことを尋ねればすぐに教えていただけたりと、子供達に目配りをされていたりと、あらゆるところまで神経が行き渡っているなということはビンビンと感じられました。そして、スタッフの皆様、とつてもかつこ良かったです。息子もあんな風に育ってくれたらいいななんて思いました。

本当にお世話になりました。ありがとうございました。機会があればまたぜひぜひ皆様にお会いしたいと思っております。では、とりあえず、また来年。

Y. Uさん(中3 目黒区東根小ことばの教室卒)

私は今、吃音で悩んでいる事、といえど今すぐ思い出すのが友達関係ではなく、授業中の発言や音読などです。吃音の悩みのイメージだと、まず第一に友達関係についてを思いつきますが、私の周りの友達は吃音の事を悪く言わないし、どちらかと言えば心配してくれます。例えば、私がどもっていると言いたい言葉を予想して「○○？」と言ってくれます。なので、今になって私の周りの環境(友達・先生)は、恵まれているな(自分で言うのも何ですが)と実感しました。「もし吃音が無ければ…」と思った事は何度もあります。けれど今、考えてみれば、それは皆「吃音のせいで○○」と吃音のせいにしていただけたのだと思います。なので、これからも前向きに吃音の事を考えて、ちゃんと向き合えていけたらいいです。また、どうしたら皆に吃音の事を分かってもらえるかなども考えて、私達吃音者の事を(それなりの苦労を)理解してくれたらいいです。

H. Y君(高2 江戸川区在住)

今回は初めてのサマーキャンプで、4回目のつどい参加になりました。もう、そろそろ皆さんの名前と顔が一致して、仲良くなってきました。さて、今回のサマーキャンプは今までの言友会とは違いちょ

っと、違った感じがしました。仲間には久しぶりに再会できたし、何よりもたくさん話せたことが僕にとっては今回の集いの最高の思い出でした。またキャンプファイヤーは小学生の林間以来でしたので、とても楽しかったです。

そして、あっという間に2日間終わってしまい、楽しかった一方、私にとっては悲しいことがありました。それは高校生の先輩方が受験勉強の関係で11月の集いは参加できないことです。サマーキャンプが終わった後の仲間との別れ。いつまでも切れない友情。私はこれらに心を打たれ、その日はずっと泣いてました。私は一応リーダーとして、仲間の相談をしていますが、みんな今日の別れ、そして3年生はこれから受験勉強があることに苦しんでいます。でも、それを乗り越えれば、後が楽になるでしょう。そして、私は早く今の先輩方がスタッフになってくれることを心から楽しみにしています。

次回参加される皆さん、特に新しく参加される高校生の方々、是非この言友会に参加してください。お待ちしております。

A. Sさん（高3 北区赤羽小ことばの教室卒）

私はずっと吃音のため、こころが病み、悩んできました。小学校、中学校と吃るのが嫌で人と話すことを避けてきました。そしたら誰も私に話しかけてこなくなりずっと一人ぼっちで孤独な生活を送ってきました。本当はたくさんの人と喋りたいのに吃っちゃうから人と喋るのは精一杯でした。私は何度も死にたいと思い、時には夜中一晩中泣いていたこともあります。でも今はこの集いに来て、同じ吃音で悩む仲間と出会えて少し未来が見えてきたような気がします。このままじゃだめだと思い私は自分を変える為にもなるべく人を避けないで話すようにしました。

今年になって接客業のアルバイトも始めました。今もアルバイトを始めた頃と変わらずどもりですがこれは自分との戦いだと思います。私は、は行で吃ってしまう為、お金を渡す時に百円や8円で何度も吃ってしまっていて凄く恥ずかしいけどこれからはプラス思考に考えて生きていこうと思いました。吃った方がかっこいいと最近になって思いました。

私は将来、声優を目指しています。声を使うお仕

事だけど私はアニメ好きでたくさんの人に夢や希望を与えられたらいいなと思います。

A. Kさん（高3 群馬県在住）

私は、昔の自分と今の自分を比べて一言で表すと吃音に対して”適当”になったと思います。でもそれは吃音についての自分の考える姿勢が和らいだという意味の適当です。今までは、何か問題にあたると全て吃音のせいにしていて一日中吃音のことばかり考えていました。でも、今は吃音について考えたりするけど、前みたいに一日中、吃音、吃音というのはなくなりました。そうしてくれたきっかけは、高校1年生の時に初めて参加したこのつどいです。今までの私は、吃音についてひたすら自分自身で考え悩んで吃音から逃げるばかり考えていました。

でも家族にも言えないような吃音の話もできたり、思いっきり話せて私にとって本当に初めての世界でした。もっと早くつどいを知っていれば良かったのにと後悔しています。スタッフの方々とても優しく、相談もできるし一生付き合える友達もできました。正直、吃音はなかったらいいのになあと思うことは少しあります。でも、吃音がなかったらこんなにすばらしい仲間にも出会えませんでした。やっぱり中高校生のつどいは何かのパワーをくれるすごいものだなと思いました。大げさかもしれないけど、この会が私を一番変えてくれたと思います。これからもっともっと悩みは増えると思うけど、みんなで相談し合って乗り越えていきたいです。



ななお（高3 目黒区東根小ことばの教室卒）

「のどもと過ぎれば熱さ忘れる」とはよく言ったものだと思う。いくらひどい味のキノコを食べても、いくら苦々しい匂いの青汁を飲んでも、たいていは一日経てば忘れてしまう。「ずっと君のことを忘れないよ」とかたく契約した恋人どうしも、長い間離ればなれになれば、心の中にある互いの存在は薄れていく。人間とはそんなものである。毎日たまったごみを、集積所に持って行って捨てるように、人は様々なものを忘れていかなければ生きていけ

ない。そうでないとたまりにたまったごみで家の中
がはちきれんばかりになり、暮らしていくことができ
なくなってしまう。

私は最近、自分が吃音であることを、吃音のある
が故に受けてきた様々なことを忘れがちになって
いる。実際的な生活を送る中で、吃音だからといっ
て不便に感じることは特にない。中学の時あれだ
け苦手だった国語の音読でさえ、今はさしたる支
障もなくこなせる。名を名乗る時も、つかえること
は度々あるにせよ、長い沈黙の時間を挟むという
ことはない。演劇部の公演に二度も出て、長つた
らしい数々のセリフをほとんど吃ることなく言った(吃
りそうなセリフを言いやすいように多少変えたこと
によるところも大きい)。小学校の学芸会で、たつた
一つのセリフを吐くのに汗をかくほど努力していた
のが嘘のようだ。

中学の最初の自己紹介でどうしても名前が言え
なかったこと、紀貫之の文章をすらすら読めなくて
クラスの人に不審の目で見られたこと、そういうもの
を忘れた訳ではない。しかしその記憶の持つ生々
しい感触は最早消え失せ、ただの「昔起こったこ
と」になっているのは否めない。どろどろと流れ行く
溶岩流がかたまり、冷え切った黒い岩になってしま
うがのように。もしかしたら、あともしばらくの時
間が経ったら、私はそういった風景、感情の記憶を
忘れてしまうかもしれない。

忘れることが悪いことだとは思わない。前述の通
り、人は忘れることで生きていける、と言うこともでき
る。しかし忘れてはいけないもの、ごみに出しては
いけない大切なものも確かにあるのだ。私にとって
吃音による「好ましくない」体験というのは、忘れて
はいけない種類のものだと思う。もしそういうことを
忘れてしまったら、私は痛みを知らない浅はかな
人間になり果てるだろう。一応のプライドを持った
人間として、私はこれ以上浅はかな人格にはなり
たくないと思う。だからそのために、私は吃音によ
る「好ましくない記憶」をずっと覚えておく必要があ
る。そういう気がする。人生を楽しく生きていくため、
それなりに満足のいく毎日を送っていくために、そ
うした「おもしろい」のようなものは必ず必要だ。漬け物
は重たい石が上に乗るからこそ、深みのある味わ
いを持つ。私はきゅうりのぬか漬けが好きである。

そのままでは「ただしゃっきりと爽やかな歯ごたえ
のある野菜」にすぎないきゅうりも、数々の調味料と
共につけることによって、見事に深い味を手に入れ
る。私はただのきゅうりではなく、長い間もまれ漬
けられ、深い味わいをもったきゅうりのぬか漬けに
なりたと思う。

M. Kさん(高3 Aさんのお母さん)

私の住んでいる町は人口が5万くらいの小さな町
です。いろいろな意味で吃音に関する情報が都市
に比べ本当に少ないという環境です。こののんび
りした所で、流されてしまうと狭い偏った情報の中
で、偏った考え方に縛られてしまいがちです。以
前の私がそうでした。ことばの教室の先生の一言
にとらわれ、吃音は親のせい、家庭環境に問題が
あるとずっと思っていました。でもつどいに来て必
ずしもそうではない、もっと違うところに原因はあ
って、その原因もはっきりしないと知りました。日本中、
世界中、やはり親は自分を責めてしまうものです。
特にお腹から産んだ母親は父親以上に強いもの
があるかもしれません。でもそれも人間として大切
な感情であると私は思います。だからこそ、自分の
見聞を広げ、沢山ある情報の中から、何が正しく
何が間違っているかを見極める力をつけ、吃音の
子供と向き合う、自分の位置もしっかりと築いてい
くことが大事なんじゃないのかなと思います。

中野(スタッフ 栃木言友会)

話し合いの中のアルバイトの話題で「コンビニの
レジのバイトでどもってしまう。自分の吃音につ
いて周囲は優しく接してくれても、自分自身がども
ることが嫌だ」という意見がありました。思い返せば、
大学1年の頃に私も「どもりを他人に知られたくない
」と思い、誰とも話さないで教室の一番前で授業
を聴いていました。私は今の中学・高校生達に同
じようなことはして欲しくありません。なぜなら、これ
から先、生きていく中で話をしないなんてことは無
いからです。確かにどもらないでスラスラ話すこと
ができれば、どんなにいいことでしょうか？でも、吃音
はなかなか治らないらしい…。だったら、どうする
か？吃音であっても話すしかないのではないでし
ょうか。

「大学 4 年間ずっと友達なんてできないだろう、友達なんていない」と思って吃音を隠し、変に意地を張って大学で孤立していたが、ふっとしたきっかけで自分の普段とは違う一面を見せた瞬間に、同じ学科の人達との距離が縮まったことで友達ができたのです。吃音も同じで隠し続けずに、どもりながらも話すことが大切なことなのではないでしょうか。栃木言友会でどもりながらも一生懸命話す会員を見て、「どもっていいんだ」と思った事は事実ですが、未だに吃音を隠してしまう自分が嫌になります。

中学・高校生の皆さんには、一人で悩まないで欲しいと思います。一人で悩むことも大切だとは思いますが、中学・高校時代には吃音以外に悩むべきことがたくさんあると思います。私は相談できる人がいませんでした。だから、皆さんの様に相談する人がいるということは、私はとても羨ましいです。そういった意味でこのつどいは大変意味のあるものだと思います。(以上 作文)

1 日目の夜のスタッフミーティングの時に、なぜ自分が今ここにいるのか不思議な気持ちになった。以前の私(人見知り、対人恐怖症)では考えられない。大多数が今日初めて会った人、或いは二回目という人達ばかりだったのに何故か緊張せず話せたからだ。このキャンプを通して、吃音で悩む中高生の生の声を聞いたことも大変勉強になった。初めは自分の吃音の経験が中高生の役に立てばと考えていたが、いつの間にか自分にも中高生から良い刺激というか学びをもらった気がする。キャンプ最後の感想を言う時に、逃げずにどもれて良かったと思う。私はキャンプ通して、改めて吃音と向き合うことができたのかも知れない。本当に良い経験をする事ができました。ありがとうございました。

江原 智弥 (スタッフ)

話し合いでは、参加者の話を引き出す事を第一に考えた。Y君やSさんが過去の辛かった経験を語り、初参加の中野さんも語ってくれた。自分も仕事で困る事を少し話してみた。吃音はいつまで経ってもやっぱり困ることはあるのだな、と思ったかもしれない。しかし、スタッフも等身大で参加者に向き

合う姿勢を大事にしていきたい。

吃音についてつどいで向き合い、また現実に戻る。その繰り返しでここ数年間を過ごしている。自分でいくら吃音を受け入れたと思っていても、日常で吃音で失敗したことがあれば落ち込むし、吃音を恨むことも未だにある。果たしてどこまで続くのか…次第に年を取ればこういった悩みも少なくなっていくのか…正直わからない。ほとんどの事は後から見れば、小さい事、人生何とかなる、と思えるようだ。しかし直面している本人はその時いっぱい、辛い気持ちに溢れている。人生はそうした事にぶち当たり、乗り越え、逃げながらも少しずつ進んでいくしかない。焦る必要はきっと無い。そう信じている。

